

神々の死の変質（死の誕生）

—『古事記』テキストを読む—

伊澤 正俊

1 はじめに

『古事記』テキスト世界では死なない神もいれば死ぬ神もある。その境目はどうして出来上がっているのだろうか。そして何故死ぬ神と死なない神がいるのだろうか。

『古事記』テキスト世界では、神は死なないものと決まっている方が、『古事記』テキスト世界にとって都合の良いことになろう。神は死なない、と述べた方が、文字通り一貫して整合性のあるテキストとなるはずであるからである。一貫して死なない神で『古事記』テキスト世界が出来上がっていた方が論理だっただけですっきりとするはずである。神は人とは違って死なない存在なのだとした方が説得力があるであろうし、テキストを読む人もなるほど納得するであろう。ところが死ぬ神と死なない神がいて我々にはその違いがどうしてあるのかを探りたいという欲望が当然出て来る。一体どうして死ぬ神と死なない神がいるのだろうか。

ここで視点を一八〇度変えてみよう。死は動物であれ植物であれ人間であれ存在するのだが、『古事記』テキスト世界の生成は勿論無から神々が誕生したと語られている。やがて国生みがなされ、その後多くの神々が生まれ、『古事記』テキスト世界の黎明期が出来上がってくる。その後また多くの神が生まれ、中には死んで行く神々が出て来る。

しかし先述したように神々は死なない存在で『古事記』テキスト世界を貫いても何もおかしくは無いであろう。ところが死ぬ神が出て来る。神が死んでから天皇や人民は死ぬ存在となる。これは先程視点を一八〇度変えればと言ったが、神々が死を獲得して行った歴史が『古事記』テキスト世界には描かれているということになるのではなからうか。

一体『古事記』テキスト世界では、死はどのように獲得されたのであろうか。

当初、別天つ神は死なずに独り神として存在した。しかし神々は時を経て死ぬようになる。ここにはどのような歴史があり、事件があり、論理ロジックがあるのであろうか。一体何故神は死ななければならぬ存在となったのであろうか。高天原の神の子、天皇も何故死ななければならぬ存在となったのであろうか。人民も何故死ななければならぬ存在となったのであろうか。この点に関して管見の限りではその研究を見ることが無い。神々の世界である『古事記』上巻を中心にして丁寧に『古事記』テキスト世界の歴史を辿ることによってこの問題を探求してみたい。

その為には上巻の始めから神々が死ぬまで、そして天皇が死ぬまでを見て行かなければならぬだろう。創世の神々から天皇が死ぬまで時系列を追って見て行かなければならない。

2

先ず『古事記』上巻において、神は天之御中主神、高御産巢日神、神産巢日神は、
並トモに独神ひとりかみト成なり坐まし而て、身みを隠かくしましき。

と表現され、宇魔志阿斯訶備比古遲神、天之常立神も

並に独神ト成り坐し而、身を隠しませしき。

と五神は別天つ神と表現されている。

荻原浅男は、最初の三神を、

みな配偶をもたない単独の神としてお成りになって、お姿を見せることはなかつた。

と訳し、残り二神を

この二柱の神もまた、ともに単独神としてお成りになって、お姿を見せることはなかつた。

と訳している。

これを西郷信綱は

《身を隠したまひき》これは身を隠して頭われなかつたということ、

としており、そして三浦佑之氏は、

その身を隠して 神は時がくると姿を隠してしまうのだが、それは、いわゆる死ではなく、目では確認できない

存在になることを意味する。

としてそれは死では無いとする。

この時点で神は死なないのであり、次の国之常立神、豊雲野神も

独神ト成り坐し而、身を隠しませしき。

と同様に表現される。荻原は、

この二柱の神もまた単独神としてお成りになって、お姿を見せることはなかつた。

とし、三浦氏は、

この二柱の神もまた独り神での、にぎわうこともなく、姿を隠してしまわれたのじや。^(注6)
 としている。

次に成れる神、宇比地迺神、妹須比智迺神、角杵神、妹活杵神、意富斗能地神、妹大斗乃弁神、於母陀流神、妹阿夜訶志古泥神、伊耶那岐神（以下イザナキと表記する。）、妹伊耶那美神（以下イザナミと表記する。）は、イザナミを除いて死は表現されない。

イザナミはその死を

火の神を生みまししに因りて、遂に神避り坐しき。

と表現されており、荻原は、

神としておかくれになる意。具体的には黄泉国に行くこと。^(注7)

とし、訳では

火の神を生んだことが原因で、とうとうお亡くなりになった。^(注8)

として死んだととっている。

西郷は、

黄泉の国に行ったことをいう。^(注9)

とし、三浦氏は触れていない。

そしてイザナミはイザナキの手によって

故、其ノ、所神避りましし伊耶那美神者、出雲国ト伯伎国与ノ堺ノ比婆之山に葬りまつりき。

と葬られる。「葬」という字が使用されており、これは死を直接意味するものであり、『古事記』テキストにおける第

一号の死である。

ところがその死の原因となった火之迦具土神（以下カグツチと表記する。）を殺したのかという曖昧にしか表現されていない。

於是、伊耶那岐命、所御佩かせる十拳劔を抜きて、其ノ子迦具土神之頸を斬りましき。

と表現されており、「死」や「葬」という表現は使用されていない。ただしその直後、

殺さ所ましし迦具土之頭於所成りませる神ノ名は、……

と「殺」という字が使われ、殺されたと表現されている。これは「死」ととって良いだろう。すると「死」第二号である。

萩原は「殺された火之迦具土神」と訳し、三浦氏も「父神イザナキによつて殺されたカグツチの、」と訳している。カグツチは殺されたのであろうが、その死は簡単に述べられている。それはこの神話の主人公ではなく、脇役なのでただ「殺されたカグツチ」と表現されているのではなからうか。この神話における主人公はイザナキ、イザナミなのである。

そこでイザナキはイザナミに会おうと黄泉の国へと追って行く。するとイザナミは「黄泉戸喫為つ。」と言い、黄泉神と話し合つてきます、と述べる。私を見るなども述べる。そしてイザナキは待っているのが耐えられなくなり、火を灯してみると八つのイカツチがその屍体にわき出して蠢いていた。ここまでは遺体の表現である。

しかしイザナミは生者であるかのように、生き返つたかのように、ヨモツシコメを遣わして追わせたり、様々な方策を取る。最後にイザナミ自らが追つて来る。これは死んでおりながら生者の姿である。そして「千引ノ石」を間に置き、イザナミは一日に千人を殺し、イザナキは一日に千五百人産ませると宣言する。そしてイザナミは「黄泉津大

神かみ」といわれるようになる。

三浦氏は、

この神話によって、この宇宙の中で死の世界が定位され秩序づけられたことになる。(注1)

としている。死の世界はようやく造りあげられた。しかし脇役であったカゲツチはこの死の世界にはいない。飽くまで脇役なのである。

この神話でわかるように、死はイザナミにおいてはゆつくりと進んでいた。葦原中国と黄泉国という空間を伴って死は進行して行つた。また時間も伴っていた。葦原中国で死に、黄泉国では生者のように現れ、その後屍をさらし「黄泉比良坂」「もつひらまか」までやって来る。空間軸でも時間軸でも死は大河のようにゆったりと流れている。死は空間と時間を経てその完成形を表わすのである。

3

この後、死は、スサノヲの「神夜良比夜良比岐」「かむやらひやらひき」の後の「故、避り追は所而、出雲国之肥ノ河上、名は鳥髪トいふ地トコロに降りましき。」の間に挟まれた、オホゲツヒメによる五穀の起源神話においてある。スサノヲはオホゲツヒメを「殺しき。」とした挿入神話である。これもカゲツチ同様その死は詳しく語られること無く『古事記』テクスト世界からは退場する。五穀の起源譚ではあるが、スサノヲの高天原追放と出雲におけるヤマタノヲロチ退治に挿まれた本筋から見れば取るに足らない位置付けなのだと考えられる。(注1)

さてヤマトノヲロチを退治したスサノヲが『古事記』テクストから去り、次に主人公となるのはオホクニヌシノカミ（以下オホクニヌシと表記する。）である。

オホクニヌシは稲羽之素菟に八上比売を得るだろうと言われ、八上比売もオホクニヌシに嫁ごうと意思表示をする。すると八十神は怒つて

「赤猪此ノ山に在り。故、和礼共に追ひ下さ者、汝待ち取れ。若待ち取ら不者、必ず汝を殺さ將。」ト云ひ而、火以ちて猪に似たる大石を焼き而転ばし落しき。余して追ひ下すを取らす時、即ち其ノ石於焼き著か所而死にましき。

とオホクニヌシを殺すことに成功する。しかしオホクニヌシは黄泉国に行くことはない。御祖命が神産巢日之命に請い、蜺貝比売と蛤貝比売によって「作り活か令メましき。」となり、「麗しき壮天に成り而出て遊行しき。」と復活する。オホクニヌシは黄泉国に行くことは無く、この世で生き返らされる。空間的には移動すること無く、時間的には多少の時間は割かれるもののこの世で生き返らされる。イザナミはヨモツヘグヒをし、現世に戻つては来なかつたが、その死は空間を伴い、時間を伴っていた。しかしオホクニヌシは空間は伴わず、時間だけが多少伴われて復活する。

その次の事件、

於是、八十神見て、且欺き山に率て入り而、大樹切り伏せ、茹矢其ノ木に打ち立て、其ノ中に入ら令むる即ち、其ノ氷目矢を打ち離ち而携ち殺してき。

が起こるが今度は、

其ノ御祖命、哭き作求むれ者、見得て、即ち其ノ木を折き而取り出で活かし、

とやはり、空間的な移動は無いが、多少の時間を伴つて再生させられる。

一体イザナミの死とオホクニヌシの死の語り方が、このように大きく違うのは何故なのであるか。オホクニヌシではイザナミのようにその死を一々語り直さないということであろうか。それとも別の理由があるのであるか。そこで問題を解いてくれる糸口となるのは、天若日子（以下アメノワカヒコと表記する。）である。

4

まず国譲りの大まかな粗筋を見ておこう。最初にアメノホヒノカミが遣わされるが、オホクニヌシに媚びて三年に至るまで返し言を一つもしなかった。そこでタカミムスヒとアマテラスは諸神を集めて、いずれの神を遣わせれば良いかと話し合った所、オモヒカネが答えるにはアメノワカヒコが良いということになり、アメノマカコ弓とアメノハハ矢を持って行かせた。

するとアメノワカヒコはオホクニヌシの娘シタテルヒメを妻として、また葦原中国を得ようとして八年を経るまで返し言をしなかった。そこで雉のナキメを遣わしたが、アメノワカヒコは与えられた弓矢で射殺してしまう。その矢はアマテラス、タカギノカミ（タカミムスヒノカミ）の元へと至る。するとその矢の羽に血がついていた。そこでタカギノカミはこれはアメノワカヒコに与えた矢であると言い、諸神等に示して呪詛して言うことには、「もし、アメノワカヒコが命令に違わず、悪い神を射た矢がここに飛んで来たのならば、アメノワカヒコに当たらずあれ。もし邪心があるならばアメノワカヒコは災いを受けて死ぬ。」として衝き返す。するとその矢はアメノワカヒコの胸を射て死んでしまう。

ここの表現、原文を載せておく。

アメノわかひこ
天若日子が朝床あさどこに寝ねいたる高胸坂たかむなざかに中りて死しにき。

しかしアメノワカヒコはイザナミのように黄泉国で生き生きとしてイザナキを窮地に陥らせたり、オホクニヌシのように復活して再生はしない。ただ「死にき。」と表記される。ただし何もしないかと言うとそうでは無く、シタテルヒメが嘆き悲しみ、それが高天原にも聞こえた。するとアメノワカヒコの父、アマツクニタマノカミとその妻子が葦原中国に降りて来て、嘆き悲しんでそこに喪屋を作り、カワカリは「葬列において、食べ物を頭に載せて運ぶ役目をする人。」となり、サギは「斎場を掃き清める役目」となり、カワセミは「死者の食事を準備し備える役目」となり、スズメは「碓（臼）で米を搗く女。葬儀のための食事を準備する役」となり、キジは「葬儀において哭く役を担当する女。」となり、殯宮のように昼は八日、夜は八夜、「以ち遊びき。」即ち「死者の魂を呼び戻すための歌舞」を行った。

これは『万葉集』に出て来る殯宮の原型、いやそれともそのものと取つてよいのではなからうか。そこでアジシキタカヒコネノカミがやつて来ると、親や妻は「我が子は死なずにいたことよ。」「我が夫は死なずにいたことよ。」として手足に取りすがつて泣いていた。その理由はこの二神が良く似ていたからだと述べている。死者が復活したと思ふのは無理もない。

しかしアメノワカヒコは完全な死となつてしまふ。現世で死んでしまふ。殯宮の原型またはそのものの効果は全く無かつた。イザナミより、オホクニヌシよりアメノワカヒコとどんどん死は人間臭くなつて行く。生き返らなくなつて行くのだ。神であるにも拘わらず人間のように死んで行く。アメノワカヒコはその第一号と言つて良いであらう。

5

ここで話を進めよう。ニニギノミコトは降臨すると、コノハナノサクヤビメを見初める。ヒメの父オホヤマツミノ

カミは姉イハナガヒメと一緒に送り出す。しかしこの神は醜くて送り返してしまふ。父オホヤマツミノカミは、娘二人を嫁がせたのを呪詛して言うことには次の様であつた。「娘二人を奉つたのは、イハナガヒメは天つ神の御子の命は、雪が降り、風が吹くとも、岩のごとく、永遠に変わりなく生きておられる。コノハナノサクヤビメは、木の花の咲き栄えるように栄えています、と祈りを込めて奉りました。」ところがイハナガヒメは送り返され、コノハナノサクヤビメだけを妻とした。そこで、

……故、天つ神ノ御子ノ御寿者、木花ノ阿摩比能微坐さむ。」トいふ。故是を以ちて、
 今に至るまで天皇命等之御命は長くはあら不ソ。

となる。天皇命等の命は長く無いのである。

この後、火遠理命（以下ホヲリノミコトと表記する。）らが生まれるが、ホヲリノミコトは五八〇歳で死ぬ。そして、その子、アマツヒコヒコナギサタケウガヤフキアヘズノミコトは叔母のタマヨリビメを妻とし、五瀬命やカムヤマトイハレビコノミコトを産む。ここで『古事記』上巻は閉じられる。

中巻は神武東征から語られるが、白肩津にて登美のナガスネビコと交戦する。この時、五瀬命は手に矢によつてまさに痛手を負つてしまふ。そして紀国の男の水門において、

「賤奴之手を負ひて乎死なむ。」トノらして、男建為而崩りましき。

と初めて「崩」と示されて死んでしまふ。また紀国の竈山にて「陵」を作られる。この後、神武は様々な経験をしてみたりして死ぬことを考えれば、五瀬命は早逝したと理解してよからう。

そして欠史八代と呼ばれている天皇が登場する。綏靖天皇、安寧天皇、懿徳天皇、孝昭天皇、孝安天皇、孝靈天皇、孝元天皇、開化天皇、それぞれ四五歳、四九歳、四五歳、九三歳、一一三歳、一〇六歳、五七歳、六三歳で亡くなる。

神武天皇も欠史八代の天皇も殯宮あらきのみやは作られず「御陵」は作られる。『古事記』テキスト世界ではニギノミコトの行為によって天皇は限られた人生を送ることになり、即、死が表現される。復活もあり得ないし、復活のチャンスがある殯宮あらきのみやも作られず、機会さえ与えられない。

我々は『古事記』上巻から『古事記』中巻の最初の場面において、『古事記』における神々の死の変質を見てとらねばならない。『古事記』テキスト世界において独り神となった神々から、兄妹となったイザナキ・イザナミ、そして国生みや神生みをし、イザナミは葦原中国と黄泉国という空間軸を通して死んで行く。時間軸も葦原中国を経由して黄泉国で生者のように扱われ、死んで行く。オヨクニヌシは多少の時間を伴って死から復活する。アメノワカヒコは矢で射られ、突然死する。殯宮あらきのみやのようなものいやそのものかも知れないがそれも作られ、昼は八日、夜は八夜復活の儀礼が行われる。五瀬命は「崩」と示されて死んで行く。神武天皇と欠史八代の天皇は殯宮あらきのみやも作られず、五八〇歳で亡くなったホハリノミコトと比して早死にと言って良からう。神々の寿命は当然のごとく人間に近づいて来るのである。

何故なら天皇は死ぬ運命であるから『古事記』テキストの上巻から中巻の初めにかけて神は段々と時の経過と共に死ぬ存在となり、天皇も死ぬ存在となる。だから神の代『古事記』上巻テキストにおいて神は死ななければならぬ。中巻に入るが天皇は死なないとならない。人臣も死なないとならない。

『古事記』テキスト世界は生と死の問題を意識して神話の順序が、独り神、イザナミ、オホクニヌシ、アメノワカヒコ、五瀬命、神武天皇、欠史八代の天皇の順に配置されていると考えるべきではなからうか。『古事記』テキストは無意識のうちにこのような順序を選択したのでは無いだろう。語り手は意識していたのではないか。どんどん人間

臭くなつていくようにしたのではないだろうか。

その後の天皇の寿命はホオリノミコトの五八〇歳に比して短く、顕宗天皇は三八歳などと非常に短命な天皇も存在する。

ニニギノミコトがイハナガヒメを断つた、いわゆるバナナタイプの神話を持つことも相俟つて天皇の寿命は有限であり、その死は避けられない。

6

神々の死と天皇の死に関して『古事記』テキスト世界は、イザナミにおいて「死」の誕生を語り、それは八つの雷神がいて腐乱した屍体を語っているがそれがまた活き活きとしてイザナキを追い詰めて、まるで生者のようである。しかし死の世界は黄泉国として完成し、その後あり続ける。オホクニヌシは葦原中国で死に、復活する。これはイザナミに比して短時間での復活である。そして忘れてはならないのはイザナミはイザナキから見た時、生者にも見えたが、「見るな」の禁忌を破つて見た時は屍体であつた。生者と死者両方の側面を持つているのである。一方オホクニヌシは、葦原中国で殺されて葦原中国で復活する。二度も再生する。イザナミに比して「死」はすぐにやつて来る。しかし二度再生し、死の時間はその復活まである程度ある。この世で死に、時間を経て生き返らされ、黄泉国には行かない。アメノワカヒコになると突然死となる。再生はしない。

イザナミにおいてはその死は生者と死者とが描かれ混合して語られ、オホクニヌシは生者と死者がはっきりとわかれて表現される。アメノワカヒコは生者から突然、死者となる。殯宮あらしのみやのようなものまたはそのものが設定されるが決して生き返らない。ホオリノミコトは皇統の神として初めて死に、その後の天皇も皆死んで行く。

これが『古事記』テクスト世界の死の構造なのである。ではどうしてこのような構造となっているのであろうか。

それは当初は神は死なずにあらなければならなかった。絶対神として死なずに永遠の時を生きる。神とはそういう存在でなければならぬ。人間とは対照的な存在でなければならぬ。

しかし天皇や人民は死ぬ存在であるからそれに近づいて来ないとならない。イザナミにおいて神の死が語られ、黄泉国が完成する。イザナミは黄泉国で屍体として語られているが同時に生者のように語られる。この死者でもあり、生者でもある中間的な存在が必要だったのである。それは後に完全な死に移行するまでの過渡期として必要だったのである。オホクニヌシは二度は完全に死に二度再生させられる。完全に死ぬのではあるが、再生も可能だった時期が『古事記』テクスト世界では必要だったのである。そしてアメノワカヒコの突然死が語られる。殯宮あひきのみやまたはそれに近いものが作られるが決して復活しない。このような事態があつて神でさえ死ぬことが語られる。それに加えてニニギノミコトのバナナタイプの神話が語られ、天皇は死ぬ存在となる。そこでホヲリノミコトの死が語られ、歴代天皇の死が語られる。死は天皇でさえ避けられないものとなったのである。死は避けられないという当たり前の論理ロジックがここに誕生する。

加えてイザナミは一日に千人殺すというのであるから死はやはり避けられないものとなる。死は避けられないという当たり前の論理ロジックが強化されるのである。

7 おわりに

死は『古事記』テキスト世界では当たり前のものでなかった。死が完成させられるまで『古事記』上巻は最初の独り神達からイザナミ、オホクニヌシ、アメノワカヒコ、ホヲリノミコトの死まで費やさなければならなかったのである。死はここまで来てやっと死の完成形が作られた。死は様々な事態を経て獲得されたのである。それが『古事記』テキスト世界の論理^{ロジック}であり、死はどうして生まれたのかを『古事記』上巻は我々に語りかけているのである。

注1 荻原浅男校注・訳『古事記 上代歌謡』日本古典文学全集 小学館 一九七三年十一月 五〇ページの訳

2 荻原浅男 注1に同じ。五〇ページの訳

3 西郷信綱『古事記注釈』第一巻 平凡社 一九七五年一月 七七ページ

4 三浦佑之『口語訳 古事記「完全版」』文藝春秋 二〇〇二年六月 一六ページ

5 荻原浅男 注1に同じ。五一ページの訳

6 三浦佑之 注4に同じ。一七ページ

7 荻原浅男 注1に同じ。六〇ページの頭注

8 荻原浅男 注1に同じ。六〇ページの訳

9 西郷信綱 注3に同じ。一五五ページ

10 荻原浅男 注1に同じ。六二ページの訳

11 三浦佑之 注4に同じ。二六ページ

12 三浦佑之 注4に同じ。二九ページの脚注
13 天斑馬あしふらうまを逆剝さかはぎに剥はぎぎ而て、所墮おとし入いる時とき、天服織女あまのほりめ見驚みおどろき而て、梭於陰上ひにほを衝つき而死てしにき。

とあるスサノヲの悪業によるこの死は主人公では無く、脇役も脇役で今論じる必要はないであろう。

14 三浦佑之 注4に同じ。八七ページの脚注

15 三浦佑之 注4に同じ。八七ページの脚注

16 三浦佑之 注4に同じ。八七ページの脚注

17 三浦佑之 注4に同じ。八七ページの脚注

18 三浦佑之 注4に同じ。八七ページの脚注

19 荻原浅男 注1に同じ。一一七ページの頭注

本稿における『古事記』の引用は『古事記』（日本思想大系本）に拠る。